

独創の原点

私の「特別研究員・海外特別研究員」時代



すずき・としたか

1983年生まれ。博士(理学)。立教大学大学院理学研究科生命理学専攻博士後期課程修了。2013年4月～16年3月、特別研究員SPD。京都大学白眉センター特定助教などを経て、2023年より現職。

鳥の言葉を解明し 新たな学問を切り拓く

鈴木俊貴 東京大学先端科学技術研究センター
動物言語学分野 鈴木研究室 准教授

鳥の言葉を解明し、「動物言語学」という新分野を切り拓いた鈴木俊貴先生は2025年、英国・動物行動研究協会の国際賞をアジア人初、史上2番目の若さで受賞した。その著書『僕には鳥の言葉がわかる』(小学館)はベストセラーとなっている。鈴木先生の独創の原点とは？

動物が見ている世界を知りたい

——小さいころから生き物に興味があったそうですね。

昆虫や魚、カエルなどいろいろな生き物が好きでした。昆虫を捕まえてきても標本にすることはほとんどなく、ケースの中で飼って、どんな暮らしをしているのか観察しました。一番知りたかったのは、動物たちには世界がどう見えているのか、意識はあるのか、何を考えているのか、といったことです。同じ人間でも、例えば赤い色は、あなたと私では違って見えているかもしれません。ほかの動物なら種類ごとに、もっと違って見えているでしょう。それを知ることはとても面白いと、子どものころから思っていたのです。

小学2年生のとき、『ファーブル昆虫記』を読み、将来は生物学者になりたい、と文集に書きました。小学校では生き物係、中学・高校でも生物部でした。

自分で研究テーマを見つけて 独学で始める

——野鳥に興味を持ったのはいつですか。

高校生のとき双眼鏡を買って野鳥の観察を始めました。ケースの中の生き物は、天敵がいなくて、餌も人が与えます。一方、野鳥は天敵から身を守るために仲間と協力して逃げたり、時には天敵に立ち向かったりします。餌を探すのも冬はとても難しくなります。双眼鏡を使えば、野鳥のすむ世界を詳細

に観察することができます。生き物を捕まえてきてケースに入れて観察するよりも、双眼鏡で野鳥を観察する方が、自分が鳥の世界へ入っていく感覚になれる。そうすれば、彼らには世界がどう見えているのか、何を考えているのかに近づけると思いました。

尊敬する生物学者の長谷川雅美先生や長谷川博先生がいらした東邦大学に進み、学部4年間で600以上の論文を読みました。最近の論文だけではなく、動物行動学を拓いたニコ・ティンバーゲン(1907～1988年)など、かなり昔の論文から読み進めました。そうすることで、学問の流れを把握しつつ、では自分ならどんな新しい研究ができるのかを考えたのです。そして卒業研究も先生からもらったテーマをやるのではなく、自分で研究テーマを絶対に見つけようと決めていました。

そのために学部3年生の冬、一人で軽井沢の森で野鳥の観察を続け、シジュウカラはほかの鳥よりもいろいろな鳴き声を出していて、それには意味がありそうだと気づきました。これまでの学問では、動物の言葉についてきちんと研究されてきませんでした。2000年以上前の古代ギリシャ時代から、動物の鳴き声は、私たちが驚いたときに発する「わっ」という叫び声のような、感情の表れに過ぎないという「常識」があったからです。その常識を覆す鳥の言葉の研究は面白いと思いました。指導教官の長谷川雅美先生の専門は爬虫類や両生類です。私は鳥の言葉の研究を独学で始めたのです。そして学術誌へ投稿するために、卒業論文を英語で書きました。

安定よりも、研究に専念できる環境を選ぶ

—その後、学位を取得し、大学に1年間勤められた後、特別研究員SPDに採用されました。

私にしかできない、鳥の言葉の研究だけに打ち込める時間が欲しかったのです。私は今まで、安定したポストよりも、1年のうち半年以上を森の中で過ごして鳥の観察を続けられる環境を選んできました。それができる研究環境の一つが特別研究員SPDでした。研究費を支給されたことがとてもうれしかったですね。それまでは、たくさんの実験道具を抱えて森の中を1日に15~20km歩き回って観察や実験を行い、寝室に暖房もない1日500円の小屋に何カ月も寝泊まりしました。それが特別研究員SPDに採用されたおかげで、レンタカーを借りたり暖房のある民宿に泊まれたりできるようになったのです。

—特別研究員SPDでは、どのような実験を進めたのですか。

シジュウカラの「ジャージャー」という鳴き声は「ヘビ」という意味の言葉だと考えられます。それならば、その鳴き声を聞いたシジュウカラは頭の中でヘビをイメージするはずで、それをどうやって証明するのか、2年以上考え続けました。ある日、ヘビをイメージすることで、動く木の枝をヘビと見間違えるはずだ、というアイデアが降って湧いてきました。実験をしてみると、「ジャージャー」という鳴き声を聞かせたときにだけヘビと見間違えて、確かめるかのように、動く木の枝へ近づいてきました。

シジュウカラの言葉には語順のルールがあることを確かめる実験も、そのころに行いました。「ピーツピ・チチチ」は「警戒して・集まれ」という意味です。この鳴き声をスピーカーから流すと首を左右に振りながら警戒して、スピーカーに近づいてきます。しかし、「チチチ・ピーツピ」と語順を逆にした鳴き声を流すと、首振りには大幅に減少し、スピーカーにもほとんど近づいてきません。語順を逆にした鳴き声は、語順のルールから外れるため、意味が伝わらなくなると考えられます。

「動物言語学」を提唱

—今後、どのようなことを目指していきますか。

私は、動物行動学の枠を超えて、認知科学や言語学など、さまざまな分野を真に融合させたアプローチで鳥の言葉の研究を進めてきました。それにより、シジュウカラの鳴き声は概念的な意味を持つ、言葉を組み合わせて文章をつることができる、といったことを証明してきたのです。それは今までにない学問分野であり、「動物言語学」と名付けました。

「言葉を持つのは人間だけ」という2000年来の常識を覆し、鳥をはじめとするさまざまな動物の言葉を、どうすれば解き明かせるのか。その枠組みを確立し、世界に発信することは、私にしかできない研究です。動物言語学は私が始めて、つくり上げてきた新しい学問分野だからです。

面白いことを見つけるには

—自分にしかできない研究を行うには何が必要ですか。

まず、面白い、不思議だと思うことを自分で見つけて、それを解明するために試行錯誤を重ねながら研究し続けることです。

—一般の人でも研究者でも、自分が面白いと思えることを見つけるのは、簡単ではないと思いますが……。

そんなことはありません！この世界は面白いことばかりです。不思議なこと、分からないことがたくさんあるからです。例えば「空はなぜ青いのだろう」と思ったことはありませんか？子どものころは誰も、そのような好奇心にあふれていたはずで、それがいつの間にか「それを知って何の役に立つ？」などと考えるようになって好奇心を失い、面白いこと、不思議なことを見つけられなくなるのでしょうか。

好奇心に基づき世界の謎を解明する研究の価値を社会全体が見つめ直すことで、さらに面白い研究をする人が増えて、新しい世界が広がります。動物の言葉が分からない世界よりも分かった世界の方が楽しいですよ。動物という他者への理解が深まり、自然との向き合い方も変わるはずです。そして多くの人たちの心を豊かにすることにつながります。そのため私は、自分の研究で分かったことを、広く一般の皆さんに紹介する活動にも力を入れています。

私が心配しているのは、分からないことがあるとAIにすぐ答えを聞こうとする今の風潮です。その答えは、誰かが解釈した一つの説明の仕方に過ぎません。ほかの視点から観察を続けることで、もっと面白い世界が見えてくるかもしれません。

—今、どのような謎を解明しようとしているのですか。

シジュウカラは、成長するにつれて約200パターンの鳴き声を出すようになります。そのような言葉の発達の仕組みについて調べています。論文を発表したら、どんなことが分かったのか、皆さんにもお話ししたいと思います。お楽しみに！

(取材・構成：立山 晃／フotonクリエイト)
令和8年1月20日取材

特別研究員SPD時代、軽井沢の森でシジュウカラの観察・実験を行う鈴木先生。

